

## リンクして深まる平和

沖縄県立開邦中学校三年 井谷 壮良

正直に言うと、私は戦争や平和について毎年作文を書く必要があるのだらうか、と疑問だった。戦争はいけない、命は大切だ、平和に過ごせる事に感謝しよう。毎年このようなありきたりの結論しか私は出せなかった。

それは、私自身が戦争を身近に感じた事がなく、生まれてからずっと平和だったからだと分かった。新型コロナウイルスの流行によって、

テレビやインターネットで新型コロナウイルスのニュースが流れ始めた当初、中国やヨーロッパの話で、日本はそこまで感染が広がらないだろう、と高をくくっていたのだ。しかし、日を追うごとに新型コロナウイルスの足音は大きくなった。いろんなデマが流れ、トイレットペーパーが無くなったりもした。そして、とうとう学校も休校になり通えなくなった。

今も街はゴーストタウンのようだ。週末ににぎわっていた店は閉まり、人気もまばら。公園にも遊んでいる子どもの姿はなく、どことなく遊具も寂しそうだ。毎年恒例の那覇ハーリーも当然中止だ。私は生まれて初めて「沈黙のゴールデンウィーク」を過ごした。

テレビをつければ、朝から晩まで新型コロナウイルスの話題一色で、必要以上に恐怖を煽っているようにさえ思えた。インターネットでも他国と比較しては政府の方針を批判したり、補償等を要求したりしている。マスクをせずつけずに出歩く人を非難する者もいれば、逆にマスクなんて意味がないと主張する者もいる。みんながそれぞれの正義を振りかざしている。

私の日常が変わり、家族の日常が変わり、そして同じように多くの人の日常が変わった。日本という国がマスクしているかのようには、息苦しく感じるのだ。

大げさかもしれないが、今の状況は戦時中と似ているのではないかとふと考えた。

楽しみにしていたランドセルを未だ背負って登校できない小学校一年生。アルバイト先が休業し進学を諦めようか迷う大学生。内定を取り消しになった新社会人。お店を閉める人。新型コロナウイルスにより次々と希望や夢が奪われていく。

戦時中も同じだったのだらうか。いや、もっと苦しかったのだらう。進学を諦めたり、夢を持つことができなかった時代。今この状況になり、私の中で戦争ということが、教科書の中の歴史だけでなく、少しだけリアルに感じた。

やりたい事ができない。言いたいことが言えない。なりたいたいものに向かって懸命に努力する事さえも許されない。その日その日を精いっぱい生きる。それでも、身近で多くの血が流れ、大事な人を失う。親を殺された子、ずっと一緒にいると思っていた伴侶を失った人、大事に育てた子を亡くした親。町中が失望で沈んでいる。そのような時代を想像するだけでもぞつとする。そして私は気付いた。いかに平和な時代を生きてきたのか、ということに。これを平和ボケというのかもしれない。

平和というのは、安心して生活できる状態のことだ。家族や社会に守られ学業や仕事ができる。夢を持つことができる。CANNOTよりCANが多い日常。

今の平和な日常を日本は七十五年間、戦争をせず築いてきた。これは、戦争を経験したオジー、オバーが積み重ねてきた努力の結晶なのだ。そう思えたのは、このわずか数ヶ月の自粛生活による不自由さが、平和学習を通じて見聞きした戦争体験とほんのわずかだがリンクしたからだ。思うようにできない悲惨な現実を生きた先人が、平和を希求したことを想像することができた。今までの私は、日常は変わらない、と心のどこかで思っていた。けれど私の思っていた日常は未知の伝染病の世界的な流行でいとも簡単に奪われてしまう事を経験して見えてきたものがあつた。

戦争は今も世界のどこかで起きている。何の罪もない子どもが血を流したり親を失ったりして夢をもつことさえできず、どうにか生きている。私達はこれを対岸の火事と思っただろうか。そう思っているら今回の新型コロナウイルスのようには火の手が身近にも回ってこないだろうか。

毎年行う平和学習。梅雨入りのジメジメした時期、決まりきった結論しかないのに、と私は湿っぽくなっていった。けれど今年からは違う。私に足りないものに気付いたからだ。それは「想像力」だ。

残念なことには年々戦争体験者は減り、生の声を聞くことが難しくなってきた。それでも、これからも平和の大切さを理解し守るために、自分のちよつとした経験をリンクさせつつバックグラウンドまで想像することが必要だと思つた。

今年もまた去年と同じように、戦争はいけない、命は大切だ、平和に過ごせることに感謝、という結論になる。けれどその重みは去年とは全く違う。